

國學院大學学術情報リポジトリ

〔談話室〕 台湾中央研究院でのポストク

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: シッケタンツ, エリック, Schicketanz, Erik メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000512

台湾中央研究院でのポストドク

エリック・シッケタンツ

筆者は、二〇一七年七月より二〇一八年八月までの十三ヶ月間、台湾の中央研究院から博士後研究員(PD)としての任を得て、資料調査のために中央研究院の近代史研究所で過ごした。大学院に入ってから以降、15年間の日本生活を経て、久々に新しい環境の中で過ごす経験となった。

現在注目している研究テーマは一九三〇年代の日中関係において宗教がどのような役割を果たしたかという課題である。当時の華北地方では、両国間の公式外交の他に、政治・経済・軍事・宗教・文化など各界のアクターたちが交錯するという地下のネットワークが存在していた。このネットワークの中心をなしていたのは一九三一年に真言宗の若き僧侶吉井芳純によって創設された中日密教研究会という仏教の組織であるが、ネットワークの関連人物には、中華民国元國務総理段祺瑞をはじめに、北洋政府時代の数多くの中国人要人、さらにはチベット密教の第九世パンチェン・ラマ、曹汝霖、清浦奎吾、松井石根、鹿子木員など、日中両側の著名な人物の名前が数多く見られる。昭和初期において両国間で試みられた民間外交の事例として注目すべきである。

日本側に関する資料を集めたので、資料調査を中国語圏に拡大することが渡台の目的であった。また、すでに北京や天津の資料館で資料を収集したものの、中国側に関する詳細な理解のために、中国語圏に長期に滞在する必要もあった。台湾中央研究院の近代史研究所はもとより、同研究院の他の研究所にも、関連領域の専門家がおり、本研究テーマにとって最適な研究環境であった。中央研究院では、多くの図書室およびアクセス可能なオンラインデータベースを通じて日本で見られない資料を入手することができ、台北にある国史館と国民党党史館においては中華民国政府の外交文書や国

民党内のやりとりなどの貴重な資料を見ることができた。さらには、近代史研究所開催の研究会に参加する機会に恵まれ、台湾、中国、欧米から集った大勢の研究者たちと交流し、多くの適切なアドバイスを得ることができた。そのおかげで日中間の宗教・政治ネットワークの姿およびその関連人物をはっきりさせることができた。

これまで、中国語の資料を扱ってきたものの、中国語圏で長い間生活したことはなかった。それゆえ、今回の滞在は言語的にも文化的にも多くの新しいチャレンジをふくんでいた。幸いなことに、PD研究員は一つの研究室を二人でシェアするシステムとなっている。この「室友」をはじめ、近代史研究所の方々に暖かく迎えられ、部屋探しに始まり、資料の読解や発表原稿の準備などなど大いにお世話になった。夕方は、台湾国立大学の院生を中国のチューターとして雇い、あらためて中国語の声調の難しさを痛感しながら、中国語会話の練習に挑戦した。台湾で研究が大いにはかどったのは彼ら同僚とチューターたちのご支援があったればこそであった。滞在中に五回も中国語で報告することができたのは、その賜物である。

また、台湾では豊かな宗教生活が営まれており、週末は独自の宗教文化を味わう目的で台湾の北部と中部を回った。たとえば、扶箕（ふき）という託宣方法を通じて、神々と密接に交流する習慣がいまも受け継がれており、扶箕結社の集まりに立ち会う機会に恵まれた。海が常に身近にあることから、航海と漁業の守護神である媽祖に対する信仰が根強く、毎年春に台中市で大甲媽祖の巡礼が開催されるのだが、それにも参加することができた。数百万人という膨大な巡礼者が集まり、あちこちから爆竹の音が絶えず聞こえ、道端の店は無料で巡礼者に飲み物と食べ物を振舞う様に、台湾宗教の「熱鬧」（にぎやかさ）を実感した。

私は台湾で得たさまざまな経験と知識をこれから國學院大學での授業において活かし、学生諸子に華人宗教と台湾の社会について伝える機会を楽しみにしている。また、資料を整理しながらその成果を論文でまとめる予定である。

（近代中国宗教・近代日本宗教）